

玉泉公園とナシ（納西）族



公園を歩いているとナシ族の民族衣装を着た年寄りの女性が散歩している姿や椅子に座って休んでいる姿に出くわす。独特の衣装で背中に脊あてをして、白布で褌がけをしている。まるで孫でもおんぶしている様だ。

背後を見ると丸い円盤が一行に七個縫いつけてある。

この七個の円盤は北斗七星を表しているのだそうだ。この直径 10cm くらいの円盤は自分たちで刺繍して作成したらしく、それぞれ違いがある。真ん中から紐が二本垂れているがこれは星の光を表すのだそうだ。芸が細かい。資料によると若い娘さんは冠のような帽子にこの七つ星をつけて赤系の衣装を着ている。年寄りになると藍染めの地味な衣装なるとあるが、若い女性の民族衣装を見ることはなかなか出来ない。

北斗七星は古来、天空の中心であり暦や羅針盤として利用されていることから信仰されているがそれを纏っているのは珍しい。もっとも「披星載月」という言葉があって、これが朝星の光に照らされ、夜月の明かりを戴いて働くという意味であるが、その勤勉の証を背負っているのだとも言われている。

少数民族ナシ族と麗江

ナシ族は現在の青海省から 8 世紀頃南下してきて、金沙江流域に住み着いた民族であり、元は牧畜民族でありイ族に近いと言われている。中国全土のナシ族の人口は 31 万人弱であり、その大部分が雲南省北部の王城の地である麗江市の古城区と玉竜ナシ族自治県に住み、四川省とチベット自治区に少人数住み着いているらしい。

2400m の高原で金沙江（長江上流）、怒江の二大水系が流れているこの地は古くから人類が住み着いていてその遺跡も多い。漢・唐の時代には吐蕃、南詔、大理の支配下にあった。

明がイ族の大理を破ってナシ族の木氏を宣慰司にしたことからナシ族の王城になったのが麗江である。

ナシ族の宗教は基本的には自然崇拝であるがチベット仏教の影響もかなり受けている。



言語的にはイ族に近いチベット・ビルマ語系であるが独自の象形文字、東巴文字(トンパ)を持っていてそれを継承している。1400 の象形文字で描かれた東巴教の経典が残されていてそこにはアミニズムらしく 2000 もの神が記載されていると言われている。

玉泉公園の周りにこのトンパ文化の研究所と博物館がある。博物館に案内してもらった。ここは麗江観光の人気スポットの一つらしい。一角で色んなトンパ文化に関する書籍や写真と記念の土産品を販売している。そこに正装した老人がいてトンパ文字の書を描いていた。ガイドの案内では東巴博士といってトンパ文字を完璧に習得しトンパ文化の研究をしている人で、今では5,6人しかいないのだそうだ。昔で言えばトンパ教のシャーマンというところだろう。服装がものものしい。観光客の求めに応じて、トンパ文字で書をしたためている。一緒に旅行した仲間もそれぞれが希望した内容で描いてもらった。「家内安全」も象形文字にするとまた違った印象になる。トンパ文字や文化は世界文化遺産にも登録されている。良い記念品になる。



古街を歩いていても壁にトンパ文字を書いているのを見かける。一般の人で完全に読める人はいないと言われている。まして観光客には判らない。読ませるといふより、装飾として使われているのだろうと思う。



上の二枚は食堂か茶館だろう。右の写真は構えの立派な屋敷で、その白壁にトンパ文字が描かれてあった。看板から判断すると書画を売っている店のようだ。印刻らしい物も描かれている。のぞいて見たかったが、門構えがいかにも高級らしく入りにくい。

行政上の麗江市は広い面積を有し、人口も114万人弱と大きい。漢族の他にナシ、イ、リス、ペー、タイ、プミ、チワン、ミャオ、フイ、チベット族等の少数民族が50%を占めている民族博物館のような場所である。

また、3500mを超える高山が42峰もある山岳地帯であるし、高原湖等自然豊かな観光資源に恵まれている場所である。世界中から、中国内から観光客が集まってくるのは理解できる。

麗江古城區

麗江観光の中心になっているのがナシ族の王都であった古城區で人口は14万人といわれ、住民の殆どがナシ族である。通常、世界遺産・麗江古城と呼ばれているのはここをさしている。



我々は南門街の「麗王大飯店」に宿泊した。中心の四方街からは離れている。最初に載せた玉竜雪山の見える駐車場に近い。駐車場の先には大きな道路が通っていてその向かい側には近代的な建物があるし、スーパーもある。ホテルは中国風の外観をしているが中は外国人の観光客に合わせた建物と設備になっていた。



ホテルの玄関を出て右方向を望むと細い路地があってその両側が商店になっている。殆どが観光客目当てのお土産売り場になっていた。



細い路地は真っ直ぐに伸びてはいない。曲がったり、交差したりで迷子になりやすい。家並みも似た様な造りなので目標を決められない。時々、振り返って帰り道の光景を目に焼き付けながらの散策となった。

精力的に歩き回って目に付いた光景を次回には紹介していくが、是非一緒に散歩している気分で見たい。